

シュヴァイツァーのアフリカ医療伝道再考

金子 昭

(天理大学おやさと研究所・教授)

(和文要旨)

20世紀初頭のアフリカの植民地における生活水準は、ヨーロッパから見るときわめて低く、両者の間にはこれ以上はないといっていほどの格差が生じていたが、それはひとえに列強の帝国主義的植民地政策による搾取の帰結に他ならなかった。その時期に開始されたシュヴァイツァーの医療伝道活動は、アフリカ人への救援というよりもヨーロッパ列強による搾取の罪への償いという意味を持っていた。彼は近代医療を持ちこんだが、その水準はあえてアフリカの現地の生活に合わせたものだった。「文化は手仕事から始まる」という彼の言葉は、アフリカの土着の生き方とその着実な発展を尊重しての現実主義的な姿勢である。この姿勢が戦後のブラックナショナリズムの台頭とともに厳しい批判にさらされた。ところが、彼自身にあっては、むしろ現地の人々のほうにこそ豊かな人間性を感じ、二度の大戦で互いに殺戮を行ったヨーロッパ人たちに人間性の危機を覚えていたのである。本稿では、格差をめぐる人間性という観点からシュヴァイツァーによる医療奉仕伝道活動の批判的再評価を試みるものである。

(SUMMARY)

The standard of living in the colonies of Africa was extremely low compared to that of Europe at the beginning of the 20th century. This was clearly nothing other than the result of exploitation under the imperialistic colonial policy of the Great Powers. The medical mission work that Schweitzer initiated at the time had meaning more as an atonement for the crimes of Europeans than as salvation for the people of African. He brought modern medicine to Africa, but he he had the courage to adapt its level to the standard of living of the people. His phrase that “culture begins with manual labor” represented a realistic attitude based on his respect for native people’s lifestyles and their steady-going development, although this attitude was unsparingly criticized later from the point of

view of black nationalism. He himself, however, rather found a rich humanity among the African people and was cognizant of the symptoms of crisis of humanity among Europeans who massacred one another during the two World Wars. In this paper, I will discuss Schweitzer's medical relief mission work and make a critical reassessment from the standpoint of humanity in relation to the 'livelihood gap.'

はじめに

かつて「密林の聖者」「世紀の偉人」として褒め称えられたシュヴァイツァーは、1950年代以降のブラックナショナリズムの台頭により、「白人優越主義者」「植民地主義の手先」と厳しく批判されることとなった。あまりに持ち上げられたことの反動もあって、人々には彼に対する批判的意見のほうが強く印象付けられた。さらに今日、植民地の時代が過去のものになるにつれ、彼の偉業も忘れられつつある。

シュヴァイツァーの病院は、当時のフランス領コンゴの植民政策の展開の中で運営されていた。この植民地は1960年にガボン共和国として独立を果たすが、彼自身はそのときすでに85歳という高齢になっていた。彼自身の報告はほとんどすべて二度の世界大戦前後の植民地時代になされていたものであり、我々はそうした時代的背景を大前提に彼の医療伝道を理解し評価していくべきである。

今日、シュヴァイツァーのテキストに接する際、次の二点にまず留意しなければならない。

第一に、欧米語にも多少そうした傾向はなくはないが、とくに我が国の場合、「差別用語」の使用はそのまま内容も差別的であると判定されることがあり、せつかくの名訳であっても、今では読むに耐えない印象を与えてしまう。土人だの原始的な種族だのといった表現が続出するために、改訳しないと著作それ自体も再版が困難になっている状況である。本稿では、そうした言葉がでてくる場合は中立的に訳出し、あわせて原語も掲げておいた。

第二に、シュヴァイツァーの言動や思想もたえず文脈によって理解しないと、無用にしてかつ偏見に満ちた誤解を与える傾向がある。「わたしはお前の兄弟だ。だ

金子：シュヴァイツァーのアフリカ伝道医療再考

が、お前の兄である」という彼の有名な言葉も、それだけ独立して取り上げられると、白人優越主義を象徴する表現として一人歩きし、批判と攻撃の対象にされてしまうのである。

シュヴァイツァーの視座は、時代状況の変化に応じた論調の変化はあるものの、基本的には変わらない。1913年から4年半の最初の滞在記『水と原生林のはざままで』が有名であるが、また第二次のアフリカ行きの報告『ランバレネ通信 1924-1927』、さらにこれ以降の書簡類を集めた『ランバレネ通信 1930-1950』その他の報告もある。これらは皆、彼を支援してくれるヨーロッパ人に向けて書かれていることを知る必要がある。また最近（2005年）に刊行された遺稿『われら亜流者たち』には、付録として1927年の「白人と有色人種との関係」が掲載されている¹。それらを読めば、彼は植民地経営を大前提とした当時のヨーロッパ人の時代認識に従って、宗主国の白人と植民地の黒人がどのように両者の利害を一致させ、健全な植民地経営をなしていくかを論じているかが分かる。植民地支配は所与の現実としてすでに存在しており、その上で彼の医療伝道も成立していたことを、まず理解しておく必要がある。

シュヴァイツァーもまた時代の子である。彼がいわゆる「上から目線」の姿勢に終始していたのは事実である。しかし、その背景には、植民者の白人と現地の黒人とでは、圧倒的な経済格差、生活格差が存在し、しかも支配的な力の上下関係があって、それが彼の活動と語りとの大前提になっていることを知らなければならない。その中で彼がいかにキリスト教的な人道精神を貫こうとしたのか。彼の言うところに耳を傾けるべきなのである。

1. シュヴァイツァーの根本姿勢

人間であることは、苦痛という恐ろしい主人の力に服従していることである²。シュヴァイツァーの根本姿勢は、人間そのものについての深い洞察に基づいている。彼の友人たちは「自然の懐で生きる現地の人々は我々ほど病気にはならないし、我々ほど苦痛を感じないものだ」と言って、アフリカに行こうとする彼をひきとめたという。我々は、この友人たちの言葉のほうに、むしろ自然と共生する人々に対して、今でも持ちがちなユートピア的なイメージを読むことができる。しかし、実際に現地で医療奉仕をしたシュヴァイツァーは、それが真実でないことを知ってい

金子：シュヴァイツァーのアフリカ伝道医療再考

る。自然と共生する生活は決してユートピアではない。黒人たちもまた病気や怪我に対しては、近代的医療技術によって救ってもらわなければならなかったのだ。例えば、彼らはすでに子どもの頃から、かんとんヘルニアのために人が幾日も泣き叫びながら小屋の中でのたうちまわり、やがて「死が救済者としてやってくる」のを待つという惨状を目の当たりにしてきた。しかしヨーロッパの近代医学では、これを確認すればただちに手術をするのが常識なのであった³。

我々人間はみな苦痛の烙印を押された兄弟団 (Brüderschaft) であって、植民地で人道医療にあたる者はこの責任を負っているのである。これは人間の文化の名の下に遂行されなければならない⁴。医療伝道に対する彼の認識と姿勢はかくして常に、人間性の本質に根ざしているという意味で根本的 (elementar) であり、それは原生林のただ中で、ヨーロッパから見れば未開 (原始) の (primitive) 生活をしている土地の人々との交流の中で育まれたものだったのである。

ヨーロッパ人は幾世紀にもわたって、黒人に不正と残虐を加えてきた。それゆえ、白人が彼らに善をおこなうのは、慈善ではなくして償いなのであり、「善いわざ」ではなく「避けがたい義務」なのである⁵。しかも、過去のあまりの不正と暴虐のゆえに、どんなに力一杯やったところで、罪の千分の一もつぐなつたのではない。金持ちと貧しいラザロのたとえ話〔現世で贅沢に暮らしていた金持ちと、その門前でみじめな暮らしをしていたラザロとがそれぞれ死後、正反対の境遇になるという話 (ルカ 16:19-31)〕を引き合いにして、自分たち白人はその金持ちであると述べている⁶。ヨーロッパ人の豊かさは植民地の犠牲の上に成り立っている。しかしそのことを自覚した者であれば、文化の国の人間 (Kulturmenschheit) として、有色人種 (die farbige Menschen) に負う責任を知り、今ようやくこれを果たしはじめていくというわけなのである⁷。

シュヴァイツァーは植民地政策の下で活動していたものの、その体験からくる洞察には、そうした政策の根本姿勢に対して、彼なりに大きな視座の転換が図られていることも読み取ることができる。彼は未開及び半未開民族 (primitive und halbprimitive Völker) に対して、自分たち白人による支配を強制する権利について言及し、それがただ支配して物的利益を獲るのであれば「否」であるが、彼らを教育し良き状態へともたらすのであれば「是」と見なす⁸。つまり自己利益のための収奪や搾取 (これが本来の植民地の目的だった) であってはならず、現地の人々への貢献や援助でなければならないということであり、これはかなり今日的な意味での人道的介入に近い発想に立っていると見えよう。

2. 植民地での白人と黒人の関係

植民地の格差とは、単なる経済的・生活的レベルや文化文明のレベルでの格差にとどまらない。それは、支配と被支配との関係に基づく圧倒的な力の格差である。この格差が端的に現われるのは労働に関わる場面である。シュヴァイツァーもこの問題について論じている。そこから見えてくるのは、彼なりにこの問題をなんとか軟着陸させようとする姿勢なのである。そこで、本稿においてもまず労働問題から説き起こして、白人と黒人との文化的格差の問題、そして両者の兄弟関係の問題に触れていきたい。

(1) 労働の問題

植民地時代における白人の見方では、黒人は怠惰であるというのが一般的な見方であった。しかしシュヴァイツァーの観察によれば、黒人は事情が必要とするときだけに働き、そうした機会がなくなれば働かない。要するに「自由人」なのである。彼らにとって、いわゆる「勤務する(Dienen)」というのは、職業(Beruf)ではなく、自由人としての生活の中断に他ならない⁹。要するに雇用関係に慣れていないだけである。これが商業上、勤勉な労働の必要性和矛盾するわけである。彼らに働いてもらうには課税と欲望を増大させるという方法があるけれど、これによって労働を真に教え込むことは不可能である。せいぜい利欲にさとくなり快楽を好むようになるが、信用できる正直者には決してならない¹⁰。シュヴァイツァーがここでは植民地政策の立場に立っていることは明らかである。しかしその一方で、彼は現地の文化に植民がなじまず矛盾することにも懸念を表明している。文化のためには、原生林の人々にそのまま村に住まわせ、教育し、その土地で手仕事を行い、耕作地を設けて幾つかの作物を作らせ販売させるなどして、堅実で落ち着いた生活を営ませるのがよいけれども、植民は、土地の富をできるだけ利用するため、あらゆる方法でできるだけ多くの人間を動かすことを必要とするのである¹¹。

ここで問題になるのは「労働強制(Arbeitszwang)」の問題である。これは、永続的な独特な職業をもたないすべての土地の人間が、政府の命令で義務として毎年いくらかの日数を商人や耕地栽培者にやとわれることを意味する。シュヴァイツァーはある程度の労働強制なしには、植民地はやっていけないことを、自らの体験上か

金子：シュヴァイツァーのアフリカ伝道医療再考

ら自覚している。彼は、人間の基本的な諸権利がこれによって制限されることを知った上で、哲学的な基礎よりも経験的な基礎から出発することが望ましいと考えている¹²。彼自身、国家による必要な限りにおいてのみ労働の強制があってもよいとし、女性の場合の配慮や児童労働の禁止などの人道的な配慮に基づく諸条件を定めている。植民地支配という「前提」に強意を置けば、シュヴァイツァーもまた植民地主義者には違いない。しかし、そうした人道的配慮のほうに着目すれば、彼は卓越した人道主義者である¹³。

彼は、労働の強制がひそかに一種の奴隷制度に変わる危険をも見抜いている。当時は、植民地の管理という名目の下で、白人の商人や耕地所有者の少なからぬ人々は、現地住民たちを物件のように扱っていたからである。また、黒人同士の間での「奴隷使用」も現地の慣習として行われていた¹⁴。白人だけが黒人を奴隷としたわけではないし、なかには奴隷制度を廃止させようとしたキリスト教宣教師たちもいた。このように、シュヴァイツァー自身の語ることの中で初めて知られる事実にも注意をはらう必要があり、そこでの彼の人間性を尊重する姿勢をこそ評価すべきではないだろうか。

(2) 黒人との文化的格差の問題

これは白人と黒人の同権主張の問題でもある。植民地では、両者間で大きな文化摩擦が生じている。シュヴァイツァーは、責任を負いながら暇のないヨーロッパの事業家が、暇がありながら責任の概念を知らない自然の子たち(Naturkinde)との間で恐ろしい葛藤に力を費やしている現実を見ていた¹⁵。白人は肩にかかる責任が重いほど、原住民 (Eingeborenen) に対して冷酷となる危険がますます多い。宣教者は同じ白人でも自らは彼らとは異なり、自分を正しいとしやすいが、彼らほどに心身をそこなう苦しみを持たないが故に、彼らを裁く勇気がなくなったとも述べる¹⁶。人間的な真実の人格と、それによる文化人たる能力とをまもるのがここでは非常に困難であることは、原生林に見る白人と黒人との問題における大きな悲劇である。シュヴァイツァー自身もまたそうであった。彼があらゆるものに錠をつけておき、自分自身もまるで歩く鍵束のようになっていたさまを見て、黒人を信用していないと糾弾するのはたやすい。しかし、そうでもしないと物が盗まれるという現実があるのである。錠を下ろしていないものは「出歩いて回る」のであって、「だらしのない」人のものは何でも盗んでもよいと見なすのが現地の常識だったのだ¹⁷。彼が黒人を人間として信用していないのではなく、ただ単に彼我の価値観がそのように全

く異なるだけなのである。高度に社会制度が発達したヨーロッパとは異なり、文化摩擦の問題はどこまでも現地の実態に即して対応していかなくてはならない。

そうした観察と経験の中から、文化のはじまりはここでは知識ではなく、手仕事と耕作であり、これによつてはじめて高い文化を獲得する経済的条件を備え得るといふ¹⁸、彼の主張も生まれてくる。そしてその意味において、未開的な民族の原住民(Eingeborenen aus den primitiven Völkern)が高度の学校教育を受けることはそれ自体不必要なことであると、彼は考えている。今日の良識からすればアナクロニズムに思えようが、しかし当時、中途半端に読み書きの知識を身につけたインテリはかえって村から根こぎにされてしまうという現実を、彼は直観してそう言っているのである。その上、ヨーロッパの安価な既製品の輸入が土地の手製品を駆逐し、事態はますます悪化していく。かくして彼は、熟練した手仕事層の人々の繁栄こそ、文化にいたる本来の道であるだろうに、と嘆くのである¹⁹。シュヴァイツァーの報告は、こうしてどこまでも現実に即したものであり、我々もその文脈をていねいにたどって理解しなければならないのである。

なお、こうした見方の根底には、彼の独自の文化理想があることも指摘しておくなくてはならないだろう。そもそも文化の本質は物質的成果にあるのではない。それは、人間完成という理想及び民族や人類の社会的政治的な状況の改善という理想を個々の人間が考えること、そしてその理念がたえず生き生きと彼らの志向の内に規定されていることにある²⁰。シュヴァイツァーの文化観の射程はここまで伸びているのであり、ただ単純な現実主義の発想に基づくものではないのである。

(3) 白人と黒人の兄弟関係の問題

シュヴァイツァーは白人と黒人との間の兄弟愛を重視したが、それは両者の間の対等な交際を意味するものではなかった。そこで彼の有名な「黒人は子どもである。(Der Neger ist ein Kind.)すべて子どもには、権威をもって臨まないならば何事もできない」²¹という父権主義的な科白や、「わたしはお前の兄弟だ。しかしお前の兄である。(Ich bin dein Bruder; aber dein älterer Bruder.)」²²という白人優越主義とも取れる科白が登場する。

彼は、白人でありながら黒人と全く等しく「対等の兄弟」となって、その伝道の生活を送ろうとした一人の宣教師の例を挙げている²³。この宣教師は黒人の村に家を建て、自らをその仲間と見なしてもらおうとしたが、そのために威望を失った。その日から彼の生活は殉教となった。彼の言葉はもはや「白人の言」として通用せ

金子：シュヴァイツァーのアフリカ伝道医療再考

ず、万事につけ黒人がお互いにそうしているように長々と議論をしなければならなくなつたのである。本当の愛情は形式的尊重と両立しうるし、まさにそうしてこそ愛し得るものである。権威については、シュヴァイツァーは独自の見方をもっている。白人が真の権威を持っているれば、黒人は尊敬する。その真の権威は、白人が人格者であるか否かにかかっている。「自然の子 (Naturkind)は我々のようにへたに教養がないだけに、根本的な(elementar)尺度だけを知っていて、すべてのものを最も根本的な尺度すなわち道徳的尺度でもってをはかる」²⁴。まさにここでは、未開(原始) (primitiv)であるがゆえに、根本的(elementar)である側面が現われるのである。そしてこの「根本的」という形容こそシュヴァイツァー自身の文化哲学の根幹をなすものである。それは人間と世界の関係、生の意義や善の本質などの基本的な問題から出発するものであり、シュヴァイツァーの生命への畏敬の思想がまさにそのような性格を持つものであった²⁵。白人は知識や技術においては黒人を圧倒し、その生活水準もはるかに近代的かもしれない。しかし逆に、黒人はより原始的な生活を営んでいるがゆえに、白人以上に根本的な文化的感覚と倫理的感性を身に着けているのである。シュヴァイツァーの慧眼はまさにそこに着目したものであった。

なるほど「上から目線」には違いないが、シュヴァイツァーは実にあたたかい姿勢で、人間と人間の関係として接している。白人は自分たちの側からすれば異質なものを、共感できないものをすべてつらぬいて見ることで、彼らの真の本性を把握すべきである。そのとき、いかに善良で価値豊かなものが見出されるかが分かるだろう²⁶。黒人の精神的な人格に触れた者は、その弱点や欠点にもかかわらず、彼らが価値豊かな人間性を有していることを知るのである。シュヴァイツァーも黒人たちとの交際において何度も憤激した体験があったとはいえ、彼らを尊敬し評価することを学んだという²⁷。

2. イエスの教えの解放的意味

シュヴァイツァーは『水と原生林の間に』で一つの章を割いて、キリスト教の伝道の問題を論じている。自然の子は、ヨーロッパ人が想像する以上によく「考えている」。シュヴァイツァーは病院で、土地の老人と自己、人類、世界、永遠との関係など、人生の究極の問題について語り合い、深い感銘を覚えた²⁸。ここでは白人と黒人の相違、教養の有無の問題は消えてしまう。彼らは、宗教の本質を理解する

金子：シュヴァイツァーのアフリカ伝道医療再考

大きな天賦の能力をもっている。すなわち、キリスト教は彼らの不安の闇を照らす光である²⁹。なぜなら、キリスト教は彼らに自分たちは自然の霊、祖先の霊、偶像などの権威の下にあるのではない。また誰も他人に不吉の力を及ぼすことはできない。かえって一切の現象には、神の意志だけが支配していると確信させるからである。結局、キリスト教は彼らにとってイエスに啓示された道徳的人生観であり、神の国と神の恩寵の教えである³⁰。ここで、シュヴァイツァーが見抜いているのは、先祖からの迷信的な観念と因習的な正義観に土地の人々が服従させられているということである。イエスによる救いは、現地の人々にとって二重の解放になる。すなわち、不安に満ちた世界観から不安のない世界観へ、非倫理的な世界観から倫理的な世界観への解放である³¹。

シュヴァイツァーは、ガロア語〔現地語の一つ〕でオガンガ（呪術師）と呼ばれていた。土地の人間にとって、治療師は皆、呪術師である。呪術は治療に用いられるだけではない。逆に呪術をかけて一実際には毒を盛ってであるが一人を病気に陥れることもあるのである。毒を恐れる上に、人が及ぼす魔力的な力も恐れている。自分の上に敵から利用されうる偶像を恐れて日々を送る人々の生活がどんなに恐ろしいものであるか、ヨーロッパ人には決して理解できないであろう。この不幸を近くで見た者であればこそ、この未開の民族に新しい世界観を提供し、彼らを苦しめる妄想から彼らを解放させることが人類の義務であることを理解することになるはずだ³²。そもそも、そうしたものは一種の偶像崇拜であって、この偶像崇拜は未開人 (primitive Menschen) の不安感から来る³³。彼の姿勢にヨーロッパ人としての傲慢さを感じることは容易であるが、現場での体験者として痛切な証言であることに耳を傾けなければならない。我々は、進み過ぎた文化文明に倦むあまり、未開社会における調和的なコスモロジーや世界観をどうしてもイメージしがちである。しかし、シュヴァイツァーの慧眼は、調和や一体感どころか、タブーや呪術のために日々恐れおののく原住民たちの姿を捉えていたのだった。彼はそのためにこそ、イエスの教えを導入し、偶像崇拜から彼らの解放を目指したのである。

3. ブラックナショナリズムに直面して

シュヴァイツァーは、第二次世界大戦後、急速に勃興していくアフリカの民族解放運動のうねりを意識しながら、『水と原生林の間に』のフランス語新版 (1952年)

金子：シュヴァイツァーのアフリカ伝道医療再考

に新たな序文をもうけた³⁴。この中で、白人と土地の人々との問題は基本的な事柄において変わらないと、シュヴァイツァーは見ている。ランバレネで最初に活動した時期（1913-1917年）では、自分たちが原住民に対して弟の幸福を願い、また教育や知識の力によって、どんな要素がその発展や進歩に最も有効であるかを判断できる兄の立場にあると考える「権利(droit)」を持っていた。そして実際、そのように行動することができたのであるという。当時の最も思慮や明察力のある原住民もまた、このことをよく了解していたことを、彼は誇りをもって証明できると語る。さらに彼らとの間には、経済的領域だけでなく、人間的精神的な関係の領域においても成果が見られた。しかし昨今の情勢の下では、我々は自らを兄と見なして行動することを断念しなければならない。弟もまた大人であり、兄と対等の資格に分別があり、また原住民もしいに自国の運命を担うものとされる。そのように、時代の精神は決定したのである。彼は、「ランバレネにおける最初の滞在記録は、植民地がまだ植民地であった時代に捧げられたつつましい記念物の形態を保っている」³⁵と、その序文を締めくくっている。

現在のアフリカ諸国がしばしば国境線が直線で引かれ、多民族モザイク国家となっているのは、ヨーロッパ列強が自分たちの都合で勢力地図を強引に作ったためである。その結果、21世紀になった今日においても植民地支配を脱した後の多くのアフリカ諸国が、同じ国内での民族間の凄惨な闘争を繰り返している。それは植民地支配の残した大きな禍根だった。現代の良識からすれば、植民地主義そのものも徹底的に批判すべきであろう。しかし、すでに現実に植民地そのものは存在しており、当時のヨーロッパ人は当然のようにしてこれを支配する権限があると見なしていた。シュヴァイツァーもまた、同時代の白人としてそうした認識や感性を共有していた。ところが第二次世界大戦以降、すっかり時代の精神が変わった。そして、彼だけが従前の流儀のままアフリカで活動しており、今やブラックナショナリズムの最も目に見える標的となっていた。彼らはシュヴァイツァーを近代化の阻止者とみなして憎み、批判の声を上げた。自分たちも白人なみの近代化を求めたのに、彼はゆるやかな発展を求めたからであった。彼はそうした批判にはついに反論せず、ひたすら沈黙を守った。

ただ、彼はあるインタビューの中で次のように述べている³⁶。今、本当に植民地のことを知り、当地の人々に善意をもつ人々にとって最も重要な目的は、植民地の人間が性急に独立を勝ち取るのではなく、文化の肝要な要素を最善の環境の下に我がものとし、それによって真に価値ある人間性に富んだ人になることである。その

金子：シュヴァイツァーのアフリカ伝道医療再考

ようにせず、民族の意思をあらわす準備ができていないまま、人々が政治に熱中してしまえば、紛争の種をまく扇動者のために沃野を提供することになってしまうだろう。強大な外国の一地方として束ねられていたものが、独立を獲得したとたん、民族間の相違が再びもたげ、互いの緊張が新しい意味を帯びてしまうことが起こりうるのである。

彼が危惧したのは、同じ人間同士であるという意味での兄弟愛・隣人愛の理想が、いまだ現地の人々の間に見られないということだった。自分と同じ民族の者だけには同情もするし、喜んで助けもする。このことは彼が何度も報告していることだ³⁷。自分とは種族の異なる人々もまた自分たちと同じ人間同士であるという思想を普及していくのが、伝道の使命でもある。我々は、シュヴァイツァーの現実感覚を踏まえつつも、倫理的な理想主義をそこに貫いていることを見落としてはならないのである。

4. 批判を超えてーランバレネに根ざす病院ー

シュヴァイツァーの植民地主義を告発した本は多数あるが、いずれもブラックナショナリズムという時代の動向に便乗してイデオロギーが先行したものだったり、たとえジャーナリストが取材をしたとしても、全く表面的な短期間の取材によるものに過ぎない。とりわけアフリカの知識人にとっては、シュヴァイツァーは格好の標的だった。

彼らは、シュヴァイツァーの生前から声を上げていた。南ローデシア（当時）の唯一のアフリカ人政党の幹部だったエンダバニンギ・シトレは、アフリカ人は、兄は年長なるが故に生涯を通じて弟から尊敬されるという側面に着目した。これは「アフリカ人の慣習では、兄は無限に弟を支配する」というわけだから、アフリカ人（弟）が白人（兄）によって常に支配されるという植民地主義の固定化を読み込もうとする³⁸。そしてシュヴァイツァーは、ヨーロッパ人の権威をアフリカ人の上に置くことを正当化するために、成長したアフリカ人を意識的に子どもあつかいしているのだとする。究極の格差は施す者と施される者との意識の格差である。一方的に上から施されるばかりなのは屈辱であろう。だからこそ、ブラックナショナリズムは敏感に反応したのである。しかし、シュヴァイツァーは治療を受けた患者たちには自分に可能な支援や報酬を負担してもらい、時には病院建物の建設にも携わ

金子：シュヴァイツァーのアフリカ伝道医療再考

ってもらおうよう、依頼していたのである。応分の負担をすることは、人をしてただ単に施される側に置くものではない。

シトレに代表されるような批判者たちの議論が最初から予断と偏見に満ちたものであることは、笠井恵二がつとに指摘している³⁹。シュヴァイツァーは何よりも現実に目の前にいる病人たちを救おうとしていたのであって、アフリカの社会問題について議論をしたり、まして独立に反対したりするような論陣を張っていたわけではないのである。

シュヴァイツァーのもとで8年間医療奉仕に勤めた日本人医師の高橋功は、旧式で汚く、医術も近代性に欠けるといふ批判は現実とは全く異なっていたと述べている⁴⁰。たしかに白人スタッフの多くは石油ランプを使用していたが、しかし手術室、レントゲン室、診察室、分娩室、重症病棟ほか重要な所には、自家発電による電灯が取り付けられていた。さらに手術室には、二台の新式の手術台と无影照明灯、冷房装置、蒸気滅菌器、乾燥滅菌器も整備されていた。つまり必要な部門には、常に最善のもの、近代的なものを取り入れていたのである。白人スタッフ（シュヴァイツァーも含まれる）が石油ランプを使用していたということは、自分たちも現地住民の生活水準に合わせようとする心がけを示すものであり、そのように病院の運営を注意深く行っていたのだ。むしろこうした姿を単に表面的に眺め、ここは旧式で不衛生な病院だと批判した側のほうに、逆に浅薄な近代主義的な発想法が見られるのではないだろうか。

優れた伝記作者のJ・ブラバゾンには、シュヴァイツァーの欠点を探し出すことが一種の流行のようにになっている現実に対して、それがいかに的外れで価値がないかを力説した⁴¹。それは実際にシュヴァイツァーの許で働いたことがないために起こるものである。例えば、不潔だと喧伝されていたが、実際には病院での手術は1962年には年間802件、1963年には950件にも上り、手術による死亡率も1.17%以下であった。これは当時のヨーロッパの平均値より低いものであった⁴²。また、病院内を犬や猫、やぎ、ペリカン、鶏、チンパンジー、アヒル、カモシカが歩き回り、さながら動物たちの楽園のようであった有様（これまた不衛生だという批判の理由の一つとなっていた）に対しては、傷を負って手当を受けた動物がスタッフのペットになっていたこともあったほか、その乳や肉が患者たちのための食用にするという実用的な理由もあった⁴³。しかし、それは何よりも彼の生命への畏敬の実践の場でもあった。また、食事の場を白人と黒人とで分けていたことで差別的だという批判に対しては、それが当時は運営上、効率的だったということと、アフリカ人は毒を

盛られることを恐れて、自分の食器からしか食事を取らなかったという風習があったからである⁴⁴。

文脈から切り離して批判することが、いかにシュヴァイツァーの本意を捉え損ねることになるかと、ブラバゾン⁴³は強調している。そうしてみれば、偉人伝や批判本などはかえって無視し、虚心坦懐にシュヴァイツァー自身の言うところに耳を澄ませることがいかに大切であることが分かるだろう。

シュヴァイツァー病院は、2013年に開設100年を迎える。彼の死後、主要な医師や看護スタッフも次々と病院を去り、一時期は閉鎖かとも危ぶまれたこともあった。シュヴァイツァーの生前は何と言っても、彼の流儀で運営されていた個人病院であったのである。1974年以降は国際的な財団法人となり、財政基盤も確立し、理事会にもガボン人が多数入るようになって、より現地に根ざした病院になっている⁴⁵。これには現地の住民による募金活動やガボン政府の多大な資金援助があった。運営体制も、ガボン政府が経費の3分の1、全国各地のシュヴァイツァー病院の後援会が3分の2を分担しているという。このことは、シュヴァイツァー病院が決して過去の植民地時代の遺物ではなく、ランバレネにしっかり根付いていることを示すものだろう。1981年には、新しい病院棟の落成式も行われた。この年以降は主任看護師が全員ガボン人になるなど、医療スタッフもガボン人を中心にアフリカ人が着実に増えてきた。こうした病院の「アフリカ化」の動向は現在、しっかりと定着するに至っている。それは、半生をアフリカ人の医療のために捧げ、最後は文字通りアフリカの土になったシュヴァイツァーの思いにも沿うものである。ヨーロッパ人の役割は、アフリカ人のためのアフリカ人による真に土着した病院になるよう、良き兄から良き友へと、時代に対応したその役割を果たしていくことが求められるだろう。

おわりに

格差とは富の極端な偏在である。植民地においては、経済や生活や文化だけでなく、政治的・社会的権限においても、白人と黒人との間には圧倒的な格差があった。それは、ひとえに両者の間における支配と被支配との関係から由来するものに他ならない。植民地主義はまさにそうしたものとして、否定され克服されるべき思想であり、事実、今日にいたる歴史はこのような方向に進んできたのである。

シュヴァイツァーもまた時代の子であった側面は否めない。しかしそうした限界の中であって、彼はキリスト教ヒューマニズムの立場に立ち、曇りなき眼差しで黒人の豊かな人間性というものを見出していた。彼は、この人間性が白人の都合による近代文明の強要と抑圧に押しつぶされることなく、時代環境の制約下で何とか健全に育まれてくことを願ってやまなかった。人間性の本質は、表面的な物的成果に左右されず、またそうした虚飾をすべて剥ぎ取った後の生のままの人間の姿にこそ、可視的になる。未開（原始）(primitiv)とされた黒人の生きざまにおいて、かえって根本的(elementar)な人間性の実相があらわになるのである。

そのように人間性の本質を凝視する根本的な視座からすれば、本当に貧しく野蛮なのはどちらの側だろうか、また不健全な精神生活を営んでいるのは、一体どちらの側だろうか。このように、きわめて逆説的な文化哲学的問いも生じるであろう。こうした視点は、昨今、我が国の底辺社会においてスピリチュアリティ（霊性=精神性）を発見していこうとする宗教者たちの姿勢にも通じるものがあるように思われる⁴⁶。シュヴァイツァーはスピリチュアリティという言葉こそ使わないが、人間性というものの本質がまさに倫理的な意味でのスピリチュアル（霊的=精神的）な成熟にあると見抜いていた点で、そうした人々の姿勢を先取りしていたと言ってよい。シュヴァイツァーは、そうした成熟が健全な形で果たされることを願いつつ、アフリカでの医療伝道に一身をささげたのであり、ここに彼のキリスト教宗教思想の積極的な意義が見出されるのである。

【略記号】

GW *Albert Schweitzer: Gesammelte Werke in fünf Bänden*, München (C.H.Beck),1973

著作集 『シュヴァイツァー著作集』（白水社刊）。また Albert Schweitzer は AS と略記する。

* 邦訳があるものの引用については、最初に原文頁数を、後に邦訳頁数を付しているが、本文中での引用は私が直接、原文から訳出したものである。

¹ AS: *Wir Epigonen. Kultur und Kulturstaat*, hrsg.v.Ulrich Körtner u. Johann Zürcher, München (C.H.Beck) 2005. これについては、金子昭「文化国家論にいたるシュヴァイツァーの文化哲学の射程—初期草稿『われら亜流者たち—文化と文化国家』をめぐる一考察—」、『天理大学おやさと研究所年報』第15号、2009年、39-59頁を参照。

² AS: *Zwischen Wasser und Urwald*, GW1: 471. 『水と原生林の間に』著作集 1:195.

³ *ibid.*, GW1:401. 著作集 1:110-111.

- 4 *ibid.*, GW1:474-475. 著作集 1:199-200.
- 5 *ibid.*, GW1:472. 著作集 1:196-197.
- 6 *ibid.*, GW1:319. 著作集 1:19.
- 7 *ibid.*, GW1:320. 著作集 1:12.
- 8 AS: *Aus meinem Leben und Denken*, 1930, GW1:200. 『わが生活と思想より』 著作集 2:229.
- 9 AS: *Afrikanishce Geschichten*, 1938(1), Hamburg (Richard Meiner), 1952:84-85. 『アフリカ物語』 著作集 5:200.
- 10 *Zwischen Wasser und Urwald*, GW1:422. 著作集 1:134.
- 11 *ibid.*, GW1:423-424. 著作集 1:137-138.
- 12 AS: *Wir Epigonen*, 327. 現代的な観点からいえば、こうした立脚点は決して社会的弱者の人権を尊重するものではないと裁断されるだろう。しかし、あくまで「経験的な基礎」から出発するところに、彼の考察の出発点がある。その時代的限界の中で、彼がどこまで真摯に人権問題に取り組んだかをこそ見ていくことが大切である。
- 13 *ibid.*, 332. 金子上掲論文、54-55 頁を参照。
- 14 *Zwischen Wasser und Urwald*, GW1:380-381. 著作集 1:86. *Afrikanishce Geschichten*: 24-28. 著作集 5:110-115.
- 15 *ibid.*, GW1:437. 著作集 1:153.
- 16 *ibid.*, GW1:439. 著作集 1:156.
- 17 *ibid.*, GW1:376. 著作集 1:79.
- 18 *ibid.*, GW1:428. 著作集 1:142.
- 19 *ibid.*, GW1:430. 著作集 1:144. AS: *Briefe aus Lambarene 1924-1927*, GW1:589-590. 『ランバレネ通信 I』 著作集 3: 150-151.
- 20 AS: *Kultur und Ethik*, 1923, GW2:118-119. 『文化と倫理』 著作集 7:34-35.
- 21 *Zwischen Wasser und Urwald*, GW1:435. 著作集 1:151.
- 22 *ibid.*, GW1:436. 著作集 1:151.
- 23 *ibid.*, GW1:436. 著作集 1:151-152.
- 24 *ibid.*, GW1:437. 著作集 1:153.
- 25 *Aus meinem Leben und Denken*, GW1:233. 著作集 2:270-271.
- 26 *Afrikanishce Geschichten*: 85. 著作集 5:201.
- 27 *ibid.*, 87. 著作集 5:204.
- 28 *ibid.*, GW1:455-456. 著作集 1:175-176. *Afrikanishce Geschichten*: 87. 著作集 5:204.
- 29 *Zwischen Wasser und Urawald*, GW1:456. 著作集 1:176.
- 30 *ibid.*, GW1:457. 著作集 1:177.
- 31 *ibid.*, GW1: 457. 著作集 1:178.
- 32 *ibid.*, GW1:364. 著作集 1:64-65.
- 33 *ibid.*, GW1:364. 著作集 1:65.
- 34 AS: *A L'orée de la forêt vierge*, Paris (Albin Michel) 1952:11-12. この序文の翻訳は野村実訳『水と原生林のはざままで』(岩波文庫、1957年)にのみあり(6-9頁)、著作集第1巻にはない。
- 35 *ibid.*, 13. 野村訳:9.
- 36 「植民地アフリカにおけるわたしたちの仕事」(1948年) 著作集第4巻、279-291頁。これはC・R・ジョイがランバレネ病院に滞在中に行ったインタビューに基づき構成された小論である。これは原本 *Our Task in Colonial Afrika, The Afrika of AS*, Boston (Beacon Press) ed., by C.R. Joy & M. Arnold, 1948 を入手できなかったため、邦訳からのみ引用する。
- 37 *Briefe aus Lambarene 1924-1927*, GW1:507. 著作集 3:45-46. 著作集 4:289-290.
- 38 エンダバニンギ・シトレ『アフリカの心』(寺本光朗訳、岩波新書、1961年〔原著1959年〕)、191-192頁参照。
- 39 笠井恵二『シュヴァイツァーその生涯と思想』(新教出版社、1989年)、396-407頁を参照。

- 笠井氏は、むしろシトレのほうに、白人のやったことをすべて攻撃する姿勢が強く見られ、それは彼がアメリカに留学したインテリの民族解放運動家であったことによるのではないかとも指摘している。
- 40 高橋功『アルベルト・シュワイツァー』（玉川大学出版、1963〔初版〕、1969〔増補改訂版〕、196-197頁）。
- 41 James Bravason, *AS: a Biography*, London (Victor Gollencz), 1976: 457.
- 42 Bravason, *ibid.*, 457. これは、シュヴァイツァーの姪のズザンネ・オズヴァルトの証言を元にしてと思われる。オズヴァルトは、当時のガボン人口 42 万人のうち、たしかにその 6 分の 1 がシュヴァイツァーの患者数に加えられるとも述べている。Suzanne Oswald: *Mein Onkel Bery. Erinnerungen an AS*, Zürich und Stuttgart (Botapfel-Verlag), 1971: 182-183. ズザンネ・オズヴァルト『ベリー叔父さん—シュヴァイツァーの思い出』（波木居純一訳、YMCA 出版、1979 年）、195 頁を参照。
- 43 Bravason, *ibid.*, 337.
- 44 Bravason, *ibid.*, 337, 412-413.
- 45 これらは新病棟落成移転 10 周年における A・フライの報告による。Albert Frey, *Das neue AS-Spital: schon zehn Jahre alt, Berichte aus Lambarene* (Das Schweizer Hilfsverein, für das AS Spital in Lambarene April 1991, AS 72. *Rundbrief für alle Freunde* (Deutsches Hilfsverein für das AS Spital in Lambarene), Mai 1991. また高橋功『私にとってシュワイツァーとその病院は何であったか』（私家版、1986 年）参照。全国各地の後援会といっても、主要なのは、ドイツ、フランス、スイスの後援会（友の会）である。日本にも友の会（社団法人シュバイツァー日本友の会）はあるものの、現在はかなり会員規模が縮小し、病院それ自体の支援はしていない。しかし、シュヴァイツァー在世当時は、「日本病棟（カス・ジャポネーズ）」を寄付するほど、財政援助活動も盛んだった。
- 46 これらの宗教者の姿勢の一端を、我々は本田哲郎『釜ヶ崎と福音』（岩波書店、2006 年）、ソウルイン釜ヶ崎編著『貧魂社会ニッポンへ』（アットワークス、2008 年）などから読み取ることができる。ここに登場する宗教者はキリスト教、仏教、新宗教などさまざまであるが、いずれも社会の底辺で生きる「貧しくされた者たち」のうちに豊かなスピリチュアリティを見出していくという点で共通しており、それはまさにシュヴァイツァーが黒人のうちに豊かな人間性を見出したのと同様の性格の視点があるのである。

キーワード：

シュヴァイツァー、植民地政策、文化、格差、ブラックナショナリズム

KEYWORDS:

Schweitzer, colonial policy, culture, living gap, black nationalism